

本会第4期のスタートにあたって

去る2月12日、鹿児島県内之浦町の鹿児島宇宙空間観測所から新型ロケット M-V型 1号機が打ち上げられ、電波天文衛星『はるか (ミューゼスB)』が予定の軌道に乗った。M-V型 1号機の開発成功により、引き続き Lunar A 計画の準備にも弾みがついたに違いない。他方、宇宙科学研究所と宇宙開発事業団が協力して H-II型ロケットを用いた大型月探査計画も昨年度スタートした。より大きな探査機を、より遠く、より頻繁に打ち上げることができる時代に入ったわけで、惑星探査、深宇宙探査に関心ある者にとっては、「時代が1段ステップアップした」との思いで、感慨深い。

しかしよくよく考えてみると、M-V型 1号機打ち上げが成功し、H-II型ロケットの月探査利用の道が開かれたとしても、ただそれだけで惑星科学としての『時代』がステップアップしたと思うのは早計かもしれない。惑星探査に利用できる『探査用ツール』がステップアップしただけであり、それによってすぐに高いレベルの探査ができるわけではない。既に惑星探査の『科学目標』がステップアップしていることを考えねばならない。探査機を送りさえすれば新発見につながった『探検の時代』はとっくに終わっている。より本質的な科学的目標の下に計画され、その探査によって太陽系及び系内諸天体の起源と進化に関する新たな知見がもたらされるような、科学的価値の高い探査が求められている。

惑星科学は理論、実験、探査の3つの柱によって支えられている。これら3本柱が密接に協力しつつ、全体として惑星科学の『究極目標』にせまる必要がある。いずれかの柱だけが単独で突出してみても、究極目標に到達することはできない。我が国の『探査用ツール』がステップアップした今、求められていることは『惑星科学そのもの』のステップアップである。それなくしては、ツールのステップアップに見合う惑星探査もできないだろう。

本会は設立以来5年を経、今年から第4期に入った。まだまだ不十分とはいえ、学会組織として、また学会運営として一応形は整ってきた。これからは『惑星科学そのもの』をステップアップすることが大きな目標になる。第4期の始まりに当たって、本会の若返りをめざし、多くの若い会員の方々に各種専門委員会委員など、本会の舵取りをお願いすることにした。我が国の惑星科学分野はまだまだそこが浅く、必ずしも世界をリードする状況にはない。会員の方々、特に若い会員の方々の一層の奮闘を期待したい。

中澤 清(第4期会長)